

ミノシリケートとPEMAを用いた試料が最も硬化時間が速く、次いで酸化亜鉛とPEMA粉末、コントロールの順となり、PEMA粉末の比率が高いほど硬化時間が短縮した。②寸法変化率：コントロールは収縮を示したが、PEMA粉末を混和したものは膨張傾向が見られ、PEMA粉末の比率が高いほど膨張が大きくなり特に粉末として酸化亜鉛とPEMAを用いた試料が最も大きかった。③弾性回復率：コントロール、アルミノシリケートとPEMA粉末は約100%に近い弾性回復率を示し、酸化亜鉛とPEMA粉末は約50%程度であった。

以上の結果からユージノールとPEMAにアルミノシリケートガラスを混合した材料を使用することにより、硬化時間の短縮、充填後の膨張傾向、弾性回復の向上が見られ、操作性および辺縁封鎖性に優れた仮封材が開発可能であることが示唆された。

17) 歯科用色彩計「シェードアイ」を用いた天然歯の色調選択

一測色部位および背景の有無による違い一

○山本 宏, 竹内 操, 池山 丈二
鎌田 政善, 嶋倉 道郎
(奥羽大・歯・補綴I)

シェードアイは歯科用小型色彩計で、上顎中切歯、側切歯、犬歯について歯頸部附近を測色し、メタルセラミッククラウン製作の際の専用陶材の組み合わせを決定するものである。しかしながら、使用可能部位が限定されているのに加え、実際の天然歯の色調と異なった仕上がりとなる場合があると指摘されている。

今回演者らは、色を表す尺度である、明度、彩度、色調のうち、ヒトが最も見分けやすいとされる明度に注目し、背景の条件を変えてシェードアイで天然歯の中央部、切縁部、歯頸部の測色を行った場合、明度がどのように変化するか検討し、そこからシェードアイの精度を高める方法について探った。

被験者は年齢20歳から33歳までの本学歯学部学生及び補綴学第一講座の所属員で、被験歯として健全な上顎右側中切歯を有する者14名を選択した。

測色は被験歯唇側面中央を縦に3分割し、それぞれを切縁部、中央部、歯頸部として行った。測色条件は、白手袋をはめた指を歯の舌面に当てた状態の背景白、黒手袋を当てた状態の背景黒、何もおかない状態の背景無しとした。

その結果、背景色が異なる場合の明度は、切縁部では有意差が認められる事が多く、歯頸部では有意差が認められる事が少なかった。また、中央部では、機械的には明度の差が認められる事が多いものの、ヒトの目では差が認められない程度のものであった。

したがってシェードアイの精度を高めるためには、背景の条件を設定して、常に同じ条件下で使用するとともに、歯頸部の他に背景の条件を設定した中で測定した中央部、切縁部の測色データを含めて総合的にシェードの決定を行うようプログラムを改良することが重要と考えられた。

18) 空隙に対する処置と矯正治療

○荻野 久

(おぎの歯科・矯正歯科クリニック)

(目的) 空隙に対する処置として義歯、ブリッジ、インプラントなど矯正治療以外の処置も考えられる。今回、上顎左右犬歯が口蓋に埋伏している症例と上顎左側中切歯が欠損した症例に対して矯正治療を実施し良好な結果が得られたので報告する。

(症例1) 初診時年齢21歳11ヵ月、女性、叢生と上顎左右犬歯が口蓋側に埋伏し萌出してこないことを主訴に来院した。上顎歯列は左右犬歯が欠損しているほかに空隙は認められなかった。大臼歯の咬合関係はAngle II級であったが上下顎の咬合には治療の必要性を感じるほどではなかった。また、セファロ分析では、ANB+3.4°で上下顎の前後的位置に問題はなかった。

(診断) 上顎左右犬歯の埋伏を伴う叢生症例

(治療方針) 埋伏犬歯の抜歯後、第一小臼歯を犬歯に代用することも考えたが審美性と最終的に良好な咬合関係を得るために上顎左右第一小臼歯の抜歯を決定した。上顎には架橋固定のためTranspalatalarch, 埋伏犬歯牽引誘導にはバリスタスプリングを併用し、Multibracket装置に